



損
暗
志
文
北島新平 絵

とべ
花
よ
と
ん
で
お
くれ

フレーベル
どうわ文庫 4

NDC913/124P/23cm

1973年初版 B 5 変形判

8191-3404-7346

楳 皓 志 文

一九二四年、青森市に生まれる。国学院大学在学中、海軍に応召戦傷、戦後文筆生活に入る。日本現代詩人会会員。文芸懇話会常任理事。日本大学芸術学部講師、産経学園講師など勤め、美術評論、児童図書、放送劇など執筆。

著書に「世界の文化遺産」（宝文館）、「月ロケットの秘密」（講談社）詩集「善知鳥」「いきもの抄」「走锚」など。
住所 浦和市岸町三二七五

北島新平 絵

一九二六年福島県に生まれる。一九四四年長野県に移り、以後七一年に上京するまで長野県下の中学校に教鞭をとる。

「遠山祭り」「坂部の冬祭り」「新野の雪祭り」などのスケッチ集を出版。さしえに「きょうまんさまの夜」（福音館）、「てんりゅう」（岩崎書店）、「百様ないこ」（牧書店）、「山のおまつり」（ポプラ社）などがある。
住所 川口市上青木町
三一―三七三一

フレーベルどうわ文庫④

とべ花よとんでおくれ

昭和48年5月1日 第1刷発行

著 者 楳皓志／文 北島新平／絵

発行者 菅野健介

発行者 株式会社フレーベル館

東京都千代田区神田小川町3の1

郵便番号 101

電話 東京(292)7781(代表)

振替 東京19640

印刷所 凸版印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

© 1973 Kōshi Maki, Shinpei Kitajima
Printed in Japan.



とべ花よとんでおくれ

榎 皓志*文 北島 新平*絵



せんじ



1

ハヤテとオオキキ

8

2

ハヤテのくらさた白く

21

3

オオキキのかいぬし

33

4

こころなにかりごと

50



5 かこまれた城

6 とんでおくれ花

7 空のあくま

8 はなけぬき紙

9 ぬまのぼとり





ハヤテと乙のさま

何百年も、むかしのことです。

武蔵のくには、ひろい空の下に、どこまでつづくかわからないほど、は
てしのない草原を、ひろげていました。

草原の東に、たいようが、のぼると、なによりも、さきに、小鳥たちが、
目をさまし、さえずりははじめました。

かがやく、ひかり。みどりの、草。

鳥たちは、大空をとび、えきをもとめ、森に、あそびました。そして、
たまごを生み、ひなをそだてました。

鳥たちが、ねぐらでやすむときには、青くすんだ月が、生きものたちの、
いのちをみまもるように、やさしく、草原にひかりをなげかけました。



けれども、やたらに、のどかな春ばかりでは、ありませんでした。

さえぎるものがない、原を、ふきあれる大風に、木のえだから、鳥のすが、ふきおとされる夜もあれば、日での夏に、水をもとめて、さまよわねばならぬこともありました。

雪が、原をうめる冬には、食べものもなく、いきをひそめてすごさなければなりませんでした。

そこに、鳥と鳥の、あらそいも、人と人の、はげしいたたかいも、あったのです。

「京のみやこに、また、いくさが、おこったそうじゃ」

そんなうわさが、みやこから、とおくはなれた武蔵の国にも、つたえられてきました。

馬にのった、さむらいたちが、あわただしく、草をふみわけ、林を、かけぬけ、行ったり、来たり、するようになりました。

そんなとき、馬は、あせでびっしよりぬれ、口から白いあわをふいていました。

里のひとびとは、顔をよせあい、声をひくくして話しあいました。

「京都は、なにもかも、もえてしまったというぞ」

「天子さまは、どうなされておろうかのう」

「足利の將軍さまは、どこへ、にげたか、わからんそうじゃ」

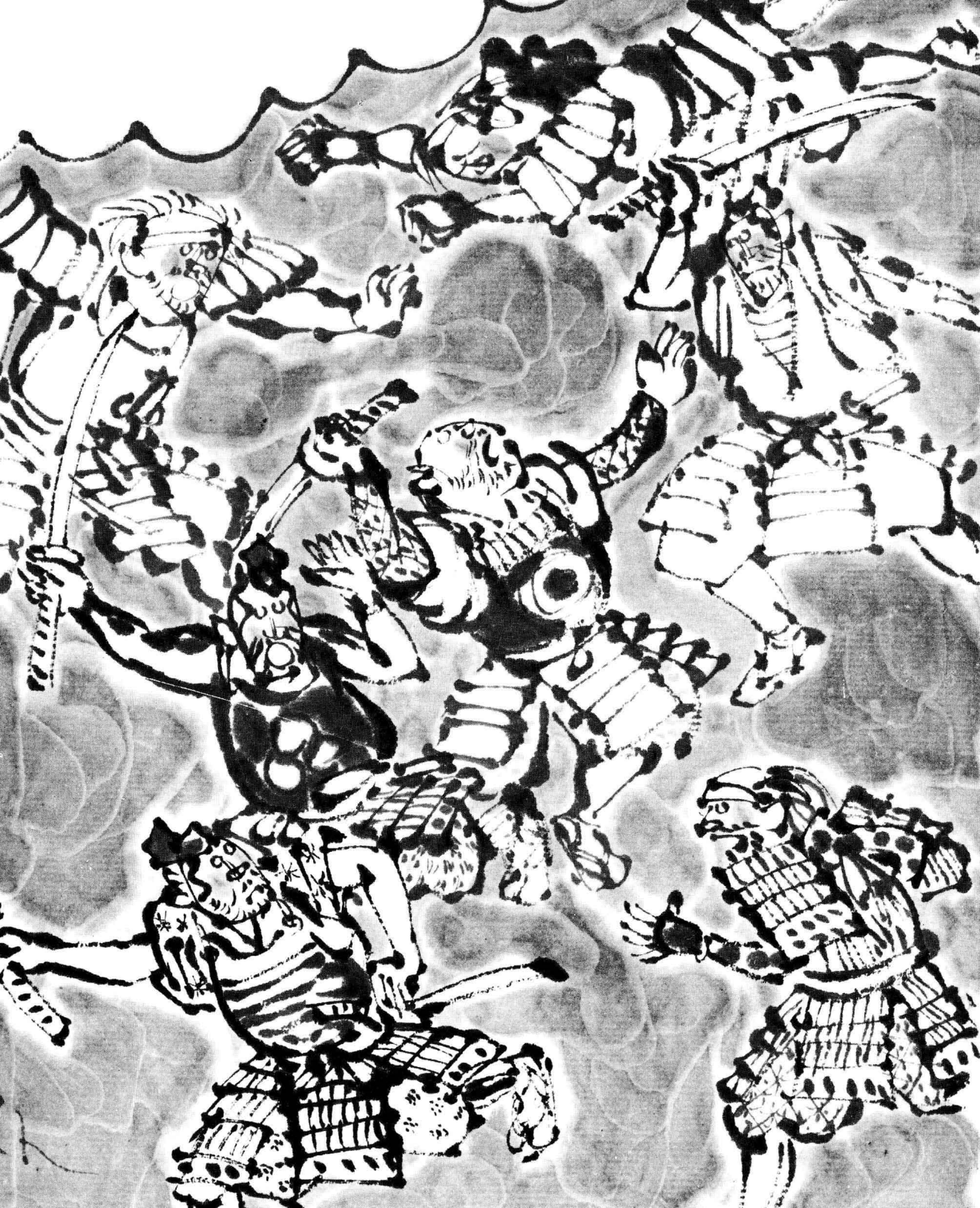
足利幕府がたおれると、日本じゅう、いたるところにつよい大将があらわれ、力と力をぶつけあい、たがいに関をうばいあう戦国のじだいになりました。

「尾張の織田信長というとのさまが、あたりの国をたいらげて、京のみやこに入ったそうじゃ」

「信長が、天下をまとめ、おさめるらしいな」

そんなうわさが、武蔵の里のひとびとにつたえられるころには、その信長もまた、本能寺で明智光秀にころされていました。

信長のけらいの、羽柴秀吉は、中国地方でたたかっていました。しゅ



じんの信長のかたきをうつため、いそいで京にかけもどり、光秀とたたかいはじめました。

そうしたあわただしい戦国のじだいに、武蔵の国の、世田谷のあたりをおさめていたのは、吉良太郎というわかいとのきまでした。

吉良という家は、足利家からわかれた一ぞくです。

吉良太郎の父・頼康もすぐれた大将でしたが、そのあとをついだ太郎は、父よりももっと、いさましい大将となりました。

刀をとってたたかえば、あいてになるものはありません。どんなあらあらしい馬ものりこなすし、弓のめいじんでもありました。

太郎は、北に目黒川をひかえた、てきからせめられにくい台地に世田谷城をかまえ、東と西と南の三方には土手をきずき、ふかいほりをほって、あたりにさかんないきおいをしめておりました。

吉良太郎は、毎日のようにけらいをひきつれ、馬を走らせ、かりに出かけました。

太郎の弓のうでまえは、ほんとうにみごとでした。

野にウサギをおえば、かならず一本の矢でしとめ、山にわけいつてキツネをかりだせば、これも一本の矢で、いたおしました。空をとぶ鳥を、いちどに二羽、いおとしたこともありました。

その太郎が、秋から冬にかけて、なによりもこのんだのは、タカがりです。

かりに出かける太郎の左のうでは、いつも、するどい目をひからせたタカがとまっていました。

ハヤテ——。太郎のかわいがっていたタカは、ハヤテとなづけられていました。

「ハヤテよ、いさましい鳥よ。高く、高くとべ。タカという名は、まったくおまえのためにあるようじゃ。おまえは鳥の王じゃ」

ハヤテは、なにものもくいちぎる、まがったくちばしと、てつでも引き



